

日 時 平成31年 2月14日（木）
午後 1 時30分から午後 3 時45分
場 所 長野保健福祉事務所
301. 302号会議室

テーマ①：多世代にわたる居場所づくり

○内山二郎（公財）長野県長寿社会開発センター理事長（以下「内山理事長」）

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました内山二郎です。今日の進行を務めさせていただきます。座って進めます。

今日の人生二毛作推進県民会議の趣旨は、今、大月部長のほうからお話があったとおりでございますけれども、今日は3つのテーマについて、シニア活動推進コーディネーター、それから取組の実施団体の関係の皆さん、それからシニアの活動実践者のそれぞれのお立場からお話をお伺いして、そしてこれを第1部といたします。第2部は、皆さんがそれぞれのテーマについてテーブルを囲んで、さらに聞きたいことだとか、それから、さらにこんなふうに協働ができるのではないかという提案だとか、そういうことをテーブルごとにお話いただき、それをみんなで共有してまとめていくという、そんな段取りにしたいというふうに思います。

○内山理事長

それでは一つ目のテーマでございます。「多世代にわたる居場所づくり」についてということで、松川町のいちごサロンについての事例をお願いします。それでは、お席のほうにお願いいたします。

松川町社会福祉協議会コーディネーターの米山さんですね、そして運営ボランティアをやっていらっしゃいます巻井さん、シニア大学のOBでもいらっしゃいます。そしてシニア活動推進コーディネーターの今村さんです。どうぞよろしくをお願いいたします。どうぞお座りください。

○今村光利シニア活動推進コーディネーター（以下「今村コーディネーター」）

よろしく申し上げます。シニア活動推進コーディネーターの今村でございます。

○内山理事長

まずですね、今村さんのほうからこのいちごサロン、どんなふうなプロセスで組み立てられたのか、そしてそこでシニア活動推進コーディネーターの今村さんがどういう立ち位置で、どんな役割を果たしたのか、その辺をお話しいただきたいと思います。

○今村コーディネーター

それでは早速説明させていただきます。テーマは「多世代にわたる居場所づくり」ということですが、初めからここに狙いがあったわけではありません。松川町社協さんのほうでサロンづくりをしたい、実は松川町、町内に30カ所以上にわたってサロンがございまして、シニア向けのサロン。こちらのほうが、どっちかという自治会単位で形成されるものでありまして、その自治会の加入者、住民の方々が参加しているんですけども、それ以外の方々、実は松川町は大体、自治会の加入率が7割ぐらいですか、残ったその方々が、居場所がないとか、誰もが気軽に来れる場所があればいいなということで、特にIターンで帰ってきた方々とか、地元になじみのない方も通える場所がほしいということで、社協さんの提案でスタートしたことになります。

今日の資料は、実は10月に「しあわせ信州移動知事室」という、知事がこのサロンを訪れて、そのときはサロンの開催日ではなかったんですが、そのスタッフの方々と懇談会を行うということで、そのときに松川町社協の方がつくってくれた資料、スライドがもとになっております。そのときは開催していなかったもので、開催の様子を伝える資料になります。

いちごサロンというネーミングなんですが、毎月15日を基本に開催ということで15サロンということ。毎年15日というのは年金支給日で、この場所がその松川の元大島という中心市街地、中心地にあるところでありまして、銀行が2件、それから郵便局、スーパー等々のある場所ですが、昔の商店街ですので、常は閑散としている場所なんです。そういったところに設置をしようという提案でございます。

左側の写真のところ、今、巻井さんも映っておりますが、彼らがシニアの方々がボランティアでこれを運営していくということになります。提案は松川町社協なんですが、運営はボランティアが全て企画運営をしていくという形になっております。

いちごサロン、昨年、私が相談を受けたのは2月、で説明会が3月、それで何度か重ねて6月15日にオープンをしたということで、こんな形で、スタート当初がこんな形になります。お茶を飲みながらみんなで話をしていたりということです。たまにはスタッフが花を取ってきて、それをテーブルに生けると、こういう生け花づくりみたいな講座がその場で始まってくるというようなスタイルです。

特にシニア大生、それから松川町在住のシニア大のOBの方々が携わってくれておりますので、そういった方々を通じて、マジックができる人たちがマジックショーを展開させたりします。ここもやっていますね、また生け花と、これは切り絵ですかね、押し花ですか、何か展示していたのを見て、次は教えてというようなことで、みんなこんなふうに集まってきます。こんなことをやっております。

男性の方々はこうやって、この人はあだ名がマスターという、エプロンをつけてマスターと書いてありますが、お茶を入れてくれる、コーヒーを入れるマスターになっております。勝手に自分たちが自分の役割を見つけていく、で、いつの間にかマスターということになっております。

歌いながら体操ということで、健康体操なんていうのもその場というか、前のときに決まるんですかね、大体ね。前回やったときの反省会の際に、次は何しようかな、こんなことができるんじゃないかなとって、こんなことが決まったりします。

子供たちも集まってきます。若いお母さん、実は未就園児を抱えているお母さんたち、近場にいる方々が家の中でもっているんですね、そういう方々も近場にこういうところがあれば来ようかなということで、若いお母さん、赤ちゃん等々が来てくれます。そんなことであります。

今日は米山さん、松川町社協の米山さんが来ているんですが、左側の小澤さんというのが初めの立ち上げのときの中心メンバーだったんですが、今日はインフルエンザで急遽、来れないということで米山さんが来ておりますが、その方等が映っております。

子供は自由に会場の中を動き回ります。おばあちゃんたちが離れを使用したり、おばあちゃんと言っていいのかどうかわかりませんが、巻井さんも小さな子供を相手に話ができているのかわかりませんが、こういう触れ合いのことが発生をしました。初めからこれ狙いじゃありません。たまたまそういうふうになっていったということです。これだけ集まってきます。

これで多世代というようになっただけで、初めはそうじゃなかったですね。シニア大、シニアの方々のサロンということがスタートラインではあったんですが、こういうふうに集まってくれたということになります。子供たちのかわいい笑顔にもたくさん出会えます。こんな新たな写真も、知事室のときにはこれを使ったんですね。

これが知事室のときのサロンスタッフとの懇談ということで、運営スタッフの方々と知事を交えて、それから来ていたお母さんのところも、代表の方にも来ていただいて、子供をつれて、一応こういった形で行いました。このときが初めて、実は松川町のこのいちごサロンというのはマスコミに載ったんですね。知事室の関係で、それまで松川町の中でもあまり広報をしませんでした。口コミが一番大事だということで、自分たちのできる範囲でできるだけ多くの人を集めようという発想ではありません。そういうところを設置して、気軽に足を運んでいただくという、何人集めてどういう事業をしようという発想ではありませんでした。とにかく場所をつくって、そこで何かをやるということだけでしたので、これがきっかけとなって、もうその翌月が大変でしたね。大勢の人が、で、今では大体30人から40人ぐらいが訪れるサロンになっております。

誰もが集まれるサロンをつくりたい、みんなのアイデアを形にとということで、実は私のところに相談を、先ほどの小澤さんという方から相談を受けました。一番、冒頭でも言ったように、町内に30カ所のサロンがあるんだけど、そこに行けない自治会未加入の人たち、未加入の人たちが大勢いると、そういう人たちが気楽に集まれる場所をつくりたいと、だけど、できればボランティアというか、運営のボランティアをシニア大学のOBの方々に声かけをして、運営スタッフに加わってほしいという相談がまず1点。それと、よく社協さんが何か事業をしてボランティアを集めますと言うと、何をやらいいんだと、やらされている感がみんな持たれると、それを何とか払拭したいというような話をされました。

きっかけになったのは、この人生二毛作劇場という長寿社会開発センターがつくっていたこの二毛作劇場の中に、飯田市の松尾の八幡というところでやっているサンロード八幡というところが、町角サロン喫茶室というのをオープンさせております。ここも昔の商店街の中の一角の空き家、空き店舗だったところにサロンを毎月15日に開催をしている。ここは非常に運営がうまくいっていて、高校生たちもここに加わって、地域人共有の一環でリヤカーで野菜の販売や何かもやっている、自分たちで自主運営をしている、ぜひこれをやりたいと、こんなようなものを見てきたのでやりたいんだけど、どうしても社協さんが旗ふりをしてしまうと、ボランティアさん

たちがやらされている感が出てくると、そういう相談を受けました。当然のことでございます、行政機関といいますか、行政サービスとして行政の生産者としてサービスを提供していく、その消費者である一般の市民がボランティアにかわる生産者側に回るということですので、当然のことながら、その事業内容を事細かに決めていけば、やらされている感が出るのは当然だなという気はします。

で、私のほうで、では社協さんの思いを説明会で伝えていただいて、その後、では実際にどういうふうにするかということで、グループワークをしたらどうだろうという提案をさせてもらってそれを行いました。こんなような形ですね。そのときには、ボランティアスタッフだけではなくて商工会ですか、そういった方々、地元の商店街の方々にもちょっと集まっていたいただいて、グループワークをさせてもらいました。運営スタッフの候補者をこのときに対象として説明会を行って、グループワークを行いました。これがグループワークの様子になります。付箋を張っていくやり方をしました。KJ法というやり方なんです、カードで集めます。どんな、ここに、上にあるんですけども、制約あり・制約なしというのが書いてあります。社協さんの提案したサロンにという制約、この場所でこの時間帯でこういうことをやる、それ以外で制約のない形で考えることが大事で、どんなサロンにしたいか、どんなことをやってみたいか、手伝ってくれる仲間はあるのか、自分は何ができるのか、自分ができること、自分のペースでできること、その場所でできることをそれぞれが考えましょうということで、カードに書いてもらいます。意見交換はしません。ひたすら自分で考えて、それをべたべたべたべた張っていく、発表しながら張っていくという、あくまでも主体は自分ですよということをやります。で、全員がそれぞれに、議論をしないということが大事です。議論をしてしまうと、「そんなことをやっても」という必ず意見が出る。それを無駄な意見として捨ててしまうのはもったいないですね。だから全部集めるんです。

まず書いてもらって、一人一人が発表する、それに意見交換をしない。発表し終わった後にみんなて話をしましょうという形をとりました。これがその表になります。それぞれのグループワークで、そうするとどういうことが起こるかということ、自分たちがやりたいこと、できること、主体が全部自分になってくるんですね。これをやってください、あれをやってくださいではありません。そういうのを集めていきます。どんなことをやりたいか、レコードを聞く会を持ちたいとか、園児との交流を図りたいとか、小さなスーパーで農産物を売ったらどうだとか、そんな意見があります。個展を開くとか、これ全部自分たちができること、やってみたいことの集合体になります。これを、ではサロンでやりましょうといったときに、誰もできませんという言葉がなくなるんですね。自分たちができる、その場所を社協さんが提供してくれるんだという方向性に変わります。

サロン終了後、必ず振り返り、次回のプラン、アイデア出しというのを行います。あくまでも主体は自分、誰かのためのサロンではなくて、まず自分のサロンとして、まず自分が楽しくて、その時々のおづきを生かして次に使っていくという流れをつくりました。だから、みんなのアイデアで一人一人ができることを持ち寄ってということで、マスターの宮澤さんという方は農園をやっておりますのでご自由にどうぞということで、落ちりんを持ってきてそこで配ったりとか、近くにいて三日月の、このときはパン屋さんですが、そこでも考えていただいてサロン、ワンコ

イン100円でお茶が飲めてお茶菓子を食べる、100円を出せるちょっとした軽食ということで、パンをつくってもらって、そこで提供すると。こういったチラシや何かも社協さんが、それならできる、つくりますよと、それぞれのアイデア、それぞれの居場所、受け付けをする、巻井さん、それからこのサクスを吹いているのは県の元職員のOBの方ですよね。近所の方なんですけど、サクスでコンサートをやったり、お茶を出すと、これをやって花が咲いたり、子供たちの流れもあります。持ってきて、次のときには自分がつくった木目込み人形ですか、それを飾ったり、そういったこともやります。

持ち寄っていく中で主体性が生まれて、そのお手伝いを社協さんがしているというスタイルが生まれてきたと、こういう仕組みを移動知事室のときに発表させていただいたと。

コーディネーターのかかわりの部分で実はスライドがとまってしまって、映らなくなってしまって青くなったんですが、一応、今日は最後まで、最後のページのこのいちごサロンが誰にとっても居心地のいい、素敵な場所でありますようにというのが社協さんの願いということで、これのお手伝いを私のほうでさせていただきました。以上です。

○内山理事長

ありがとうございます。ということで、いちごサロン、いちごサロンって、あのいちごかなと、もちろんあのいちごもあるんでしょうけれども、毎月15日に開くという意味での15というネーミングなんですね。

○今村コーディネーター

このネーミングも実は運営の・・・

○内山理事長

運営委員会から出てきたと、はい、ありがとうございます。

巻井さん、今の話がありましたけれども、巻井さんは長寿社会開発センターの賛助会の会長さんもやられていて、時々会議を一緒にするんですけれども、兄弟とこう呼ばれたりするんですけれども、兄弟ではありません。

○巻井清人 いちごサロン運営ボランティア代表（以下「巻井清人さん」）

写真の中でよく目立ちますね、頭が。

○内山理事長

何回も出てきましたものね。今の話の中で、今村コーディネーターがつないだということもありますけれども、要するに、巻井さんたちが、要するに型にはまらない自発的なそのサロンというふうな、そのときにこう、相談を受けたときにどんなお気持ちで受けられましたか。そんなことという感じだったんですか、ああ、それはおもしろいねという感じだったんですか。

○巻井清人さん

いろいろな意見があっといういろいろな話が出たんですけれども、何しろ、はっきりいうと、とりあえずやってみようと、やってやりながら考えていこうということで始めたんですが、はっきり言いますと、想像以上にうまくいきました。わりとスムーズにいろいろ、人も集まりましたし、初めは人が集まるのかなというようなことでしたけれども、初め社協さんのほうから町の民生委員の方たちに声をかけてもらって、民生委員の方たちが、一人なり二人なり、どなたか案内してもらって、一番初めはそうでしたね。それで、そこそこに格好がついて、それから最低でも25人とか30人とか、割合に、次第に集まり始めて、今では会場がもう30人以上入るともう、ちょっと狭くなるような状態になっております。

○内山理事長

運営スタッフが、いろいろな内容の企画だとかプログラムとかを考えていらっしゃるんですけれども、これはみんな自発的にいろいろなアイデアが出て、ではそういう形にしようという形になるんですか。

○巻井清人さん

おかげさまでシルバー、いわゆるシニア大学のOBの人たちがいろいろやっているグループがありまして、そのグループの人たちが私たちも手伝うよとか、俺にもやらせてくれとかという格好で、手品があったり歌があったり、毎回毎回何らかの出し物をやっております。

○内山理事長

シニア大学で社会参加の授業を随分力を入れてやっているのと、その人たちのOBがかなり参加していると。

○巻井清人さん

OBだったり現役だったり。

○内山理事長

現役だったりということですね。では今村さん、その辺を上手につながれているという感じがすかね。

○今村コーディネーター

もう、今になってはつなぐというより、出てくるアイデアにただ流される、私のほうは、多分、社協さんもそうだと思うんですけれども、次にこんな人が出たいという、やっぱりシニアの方々の発表の場、活動の発表の場としても。

○内山理事長

なるほど、自分たちの自己実現の場であるし、発表の場でもあるわけですね。はい、ちょっと時間でいっておりますので、すみません。

それで社協の米山さん、米山さん、社協の役割というのはそこでは、今、今村さんからご説明がありましたけれども、改めていうとどういうふうな支援をされたんでしょう。

○米山和樹 松川町社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター（以下「米山和樹さん」）

社協としては、いちごサロン、社協はあくまでこう後方支援の形を担っておりますので、事務的なことですね。チラシの広報の面だったりとか活動の、協力してくださる方をつないであげたりとか、なるべくこうシニア大学の今のスタッフさんの意見を尊重しながら、あくまで活動するのはシニア大学のボランティアさんなので、その方たちに沿った支援をさせていただいております。

○内山理事長

先ほどの話で、町内に30カ所サロンがあるんだけれども、自治会に加入していない人たちが多くと、その人たちをどう、集まれる場に呼び出すかということだったんですが、社協って、そのサロンはそんなにつまらないんですか。

○米山和樹さん

社協、別にそれぞれ開催しておりますので内容はそれぞれなんですけど、やっぱりこう活動がつまらないとか、そういうわけではなくて、やっぱりこの、住民がどうしてもニーズが合わない場所だったりすると、ちょっと未開催の地域になってしまうんですけども、その方たちが、こう町に出て楽しんでいただけるようなものをつくれるようにということで。

○内山理事長

社協は住民のこのニーズをすくい取って、それにこたえるというのが基本的な姿勢だと思いますけれども。やっぱりそこで、やっぱりコーディネーターや、それからシニア大のOBなんかと連携することによって、より住民に近づいた活動の支援ができるようなことですよ。

それで、この場所はあれなんですか、何かこの図によりますと、商店街のフリースペースというのがありましたけれども、これ場所は。

○米山和樹さん

場所は、松川町であらう商店街、商店街がありまして、その回りに、先ほど説明しましたとおりなんですけども、銀行だったりとか大型のデパート・・・ショッピングスペースがあったりとか、周りにこう、人が集まる場所であるので、それとかけ合わせて年金を当日、金融機関に訪れる方たちが、ちょっと帰りにフラットちょっとお茶を飲んでいただけるようなということで、なるべく・・・松川町のほうにマークンカードなど、商工会のその事業組合があるんですけども、そこでフリースペースを開放しております。

○内山理事長

フリースペースを開放してね、はい、もっともっとお聞きしたいところですけども、ちょうど時間になってしまいました。

タイムキーパーになって、これだとね、緊張してやめなくてはいけないという状況に、とりあえず、後で聞き足りないところはちょっとグループワークになったときに突っ込んでお聞きいただければと思います。はい、とりあえず、第1のケースでございます。どうもありがとうございました。

テーマ②：シニアの就労に向けた取組

○内山理事長

それでは2つ目のテーマでありますけれども、シニアの就労に向けた取組についてということで、ハローワーク諏訪なんかを中心に展開した事例でございます。

これは有限会社トップバリューの社長でいらっしゃいます嶋崎さん、それからレタス農家の・・・トップリバー、ごめんなさい、トップリバーですね。はい、レタス農家の代表の松木さん、それからシニア就労者の中山さん、それからシニア活動推進コーディネーターの矢野さんでいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

矢野さんに少しお話をいただきたいんですけども、この就労に向けた取組、諏訪エリアを中心に活動でいらっしゃるんですけども、これどんなふうなことから始まってどう展開したのか、ちょっと簡単にお話いただけますか。

○矢野明見シニア活動推進コーディネーター（以下「矢野コーディネーター」）

5年前にシニア活動推進コーディネーターになったときに、まずこの全県のそのエリアのシニアの方のまず思いを調査しまして、その中にやはり働きたいという方たちが多く。ではハローワークのほうに尋ねてみましたら、では実は人材不足だと、それがもう昨今、たった5年間のうちにどんどんと有効求人倍率も変化しまして、今、諏訪は1.8と、今日も伊原さんに来ていただいておりますが、昨日も伊原さんに生涯現役促進、地域連携事業の説明会をやっていたんですけども、本当に求人難であります。

そんな中で、特に自分自身にはスモール面接会、シニアプログラムの段階で農家の方たちとのつながりがありまして、地域ネットワークがございましたので、そして松木さんを初め実はトップリバーの嶋崎さんからも人材不足がありますという話をお聞きしまして、ハローワークに働きかけまして、シニアワークプログラムの後の手当としてスモール面接会という形を、ハローワークさんでやっていただくということになりました。

○内山理事長

スモール面接会、これは端的にいうとどういう面接会なんですか。

○矢野コーディネーター

実はハローワークスは、2階の本当に狭いエリアなんですけど、そこに6社、5社から6社ぐらい来ていただいて、そしてお仕事を求める方たちにも来ていただくということですね。

○内山理事長

なるほど、それでお見合いみたいな形ですか。

○矢野コーディネーター

そうなんです、まさにそのとおりで。そこにはやはり仕掛けがありまして、呼ぶためにはハローワークさんが頑張ってお考えられまして、DMを、例えば100流していただき、特にこの職種を狙っているという方に対して100ぐらい、100以上、いつも出していただいて、おおよそ、今回もそうですけれども、30人とか、レスポンス率が非常に高い状態で集めていただいて。

○内山理事長

これを何回も何回も・・・

○矢野コーディネーター

何回も何回もやるんですね。

○内山理事長

今までどのぐらいされたんですか。

○矢野コーディネーター

そうですね、前回のとき、去年、一昨年場合は26回・・・

○内山理事長

26回。

○矢野コーディネーター

今回も2月、3月も続きますが25回やっております。

○内山理事長

それは、そのほしい人と、それから働きたい人が、その割合はどうなんですか。

○矢野コーディネーター

就職率が非常に高いですね。キーポイントは会を重ねて、松木さんはそうですけれども、その場に立つことによって、人を雇い入れるというのは何ぞやという意識が変わってきます。そしてほかの方のほかの農家さんの条件を聞くと、ああそうか、こうしたらいいんだとか、こういう言い方がいいのかとか、そういう圃場での整備にもつながりますし、そういった形で求人者の

方たちも非常に、回を重ねてこうメリットがあります。求職者の方も全く一緒に、回を重ねることによって、はじめて会う方もありますけれども、度胸がついてくるんですね、慣れてくるんですよ。

実は今回、中山さんは初めて、第1回目のスモール面接会でバッチリお見合いが決まって、就職されたですけれども、やはりそのときも迷ってもハローワークにまず足を運んだという、1個目の行動から・・・

○内山理事長

第1回目の・・・

○矢野コーディネーター

はい、1回目のときなんですけれども。

○内山理事長

競演がそこで結ばれた、お二人でいらっしゃるんですね、今。

○矢野コーディネーター

そうなんです。そこに、やはりハローワークでDMがもう一度来たり、ハローワークの窓口の方がこういう面接会がありますよと押しにくさったから、農業と思いながらも、そうですね、中山さん。思いながらも、実は本当に内勤のお仕事、デスクワークをずっとされていた方なんです。そこに後押しがあって、それで初めて良縁になったと。

○内山理事長

良縁は難しい。そういう中で、コーディネーターの矢野さんはどういうお立場で、どういうふうなこう関係で結ばれているんですか。

○矢野コーディネーター

そうですね、まず面接会に来ていただくためのまず求人側ですね、事業者側の方たちにまずお声がけをする。1社だけでは、2社だけではだめです。もともと地域ネットワークがありますので、そこで人材がほしいという方、もう既にわかっておりますので、そんなところにもお声がけをして、やりますよ、こんなふうにやりますよという、料金設定がハローワークさんとでできた段階でしっかりとそこを周知してくる。そして求人に関してもできる限り、例えば新聞とかそちらのほうで告知していただくように働きかけます。

○内山理事長

マスコミに対してね。

○矢野コーディネーター

それはもちろん主催はハローワークなので、ハローワークさんのほうからやっていただくようお願いをして、周知にという形ですね。

○内山理事長

という、陰の、ですね。

○矢野コーディネーター

よく言うんですけども、パシリですね、パシリテーター。

○内山理事長

パシリテーターね。ということでありますけれども。

そして、今日ご出席の松木さんと中山さんですけども、松木さんはレタス農家、今、農業をやっているんですよ。もともと農家のご出身だったんですか。

○松木裕 ゆたかなれたす代表（以下「松木裕さん」）

ではないんですね、両者ともに公務員で、全く農業系ではありませんでした。

○内山理事長

何でまた、農業を。

○松木裕さん

そうですね、いろいろ話すと大分長くなっていく気がするんですけども、個人的にはやはり地域に根ざした仕事につきたいという思いを学生時代に持ちまして、そこから長野県でどんな形がいいかということから、農業というものを選びました。

○内山理事長

何でレタス。

○松木裕さん

これはもう、自分は長野県で農業さえできれば何でもいいと思って、で、なおかつ社員としてではなくて農家として独立したいと。そういう思いの中でこう、どういうふうな道をたどれば農家になれるのかというふうに探す中で、トップリバーさんという会社と出会って、そこに就職をして、研修をして、独立をしたという形です。

○内山理事長

大学時代からそういうことを考えていたんですか。

○松木裕さん

そうですね、割かし農業には、もう中学、高校あたりから興味があったんですけども、全然関係ない進路を進む中で、大学のときに最終的に腹が決まったというところです。

○内山理事長

なるほど、はい。ということで、そしてさっきのお見合いの場で中山さんをゲットされたんですね。

○松木裕さん

はい、まさに第1回目の、しかも最初に自分のブースというか、来てくださった方で大変感謝をしております。

○内山理事長

中山さんを見て話をしてひらめいちゃったんですか。中山さん、ちょっと聞いてみましょう。この若い松木さんと出会ってどうだったんですか。

○中山正彦 ゆたかなれたす社員（以下「中山正彦さん」）

きれいごとを言うわけではないんですけども、面接会の際にたまたま隣に座って、隣り合わせて、何か話を聞いているときに飾らないし、この人ならピピッと何か直感で感じたと、ピピッと来たというのがあります。

○内山理事長

なるほど、こうやってお二人を見ていると、どちらがもともとの専業農家であったのかという印象を受けますけれども、もともとは事務職だったんですか。

○中山正彦さん

そうです。デスクワークをしていました。

○内山理事長

デスクワークをしていたと。

○中山正彦さん

肉体労働というものは一切したことがなかった。

○内山理事長

したことがなかった。そして退職されて・・・

○中山正彦さん

そうです、早期退職をして。

○内山理事長

そして、これからどういうふうに行こうかと、ちょうど人生二毛作ですよ。そのときに農業というのは自分のイメージの中であつたんですか。

○中山正彦さん

農業というのはありました。先ほどの矢野さんともお話したんですけれども、歴史の中でなくなる職業の一つじゃないかなと、神余の昔から農業というのはなくなる仕事だから、大切なんじゃないかなというふうには思っていました。

○内山理事長

思っていた。そんなときに松木さんと出会う、そしてまたピピッと来ちゃったんですね。それで実際働いて、今、いらっしゃるわけですが、今はどんな感じでしょうか。農業に携わっていらっしゃるんですか。

○中山正彦さん

最初、こんなかっこういいことを言っているんですけれども、最初はもう全然肉体労働をしたことがないので、ぬかるみに足をとられて、足が抜けなくなって松木さんに助けてもらったり、もう筋肉痛で歩けなくて、孫と一緒に這って歩いていたような本当にすごい生活をして、こんな仕事、果たして続くのかなと心配になりましたけれども、やっぱり1日、日に当たって健康的な生活をしていたので、健康的にもすごく体も健康になったし、いいところがいっぱいあります。

○内山理事長

松木さん、こんな何か使いものになるような、ならないような人でも、ちゃんと立派な農業者として育つんですよ。

○松木裕さん

全く問題ありません。特に自分はトップリバーの研修時代に、中山さんよりもずっと高齢の方、場合によってはもう15から二十歳、20ぐらい上の方々とも一緒に働いて、むしろ中山さんを見た時に若くてラッキーだと思ったぐらいでしたので、また、農業というのは自分も一気に始めたので、意外と、その経験のあるなしは全く自分としては関係なくて、これから必死に素直に向き合ってください方というのが一番重要でしたので。

○内山理事長

でも農業にはやっぱり科学的なその先生や、スキルも必要になってきますよね。それはやっぱりその訓練をするというか。

○松木裕さん

そうですね、最初からただ詳しい、細やかな話をしてもなかなかわかる部分とわからない部分が出てきてしまいますので、まずはレタスにもいろいろな種類があるんですよとか、そういったところから興味を持っていただくというところから入っていただいています。

○内山理事長

はい、そして、トップリバーの社長、嶋崎さん、全然農業に造詣がなかった松木さんを雇って、そして農業者として育て上げられたということで、そして中山さんも現場に出ていただくとか、社長としてはどうですか、今の状況は。

○嶋崎秀樹（有）トップリバー社長（以下「嶋崎秀樹さん」）

別に自分のところの会社云々じゃないんですけれども、私も脱サラなんですけれども、うちは松木君のように非農家出身、かつ地元の子じゃない子を数年間で育てて、松木君のように農業経営者にさせて、中山さんたちのような、中山さんは本当に若いほうなんです。今、うちの会社自体も40名以上、松木君も5～6名いますけれども、もう65歳～70歳が平均です。それで、今までの農業というのは農家がやるものだと思います。それは家庭的なものであって、一部を除いて、私たちが求めるものは、松木君のような農業経営者、若い農業経営者が経営を行い、そこに60代、70代、今、80代の方もいるんですけれども、要するに農作業と一緒に中山さんたちにしてもらおう。もちろん単なる会社の社長と従業員ではなくて、一緒に朝飯を食べ、一緒に畑で働き、そういうような、農業はこれからのノーギョーなんで、百姓じゃないので、ぜひシニアの方にも、もうシニアなくして農業はできないというのが農業経営なんで、それを松木君が実行し、そして中山さんが働いていただく、そういう取り持ち、お見合いを矢野さんにしていただいたというのが現実でございます。

○内山理事長

なるほど、それにしてもあれですよ、シニアといっても、本当にまだ60そこそこから80代までいらっしゃる、体力的もいろいろと差があると思いますけれども、やっぱり農業というのは、そういうこう体力やいろいろな状況に応じて働ける、そういう場というのはつくれるわけなんですかね。

○嶋崎秀樹さん

これ松木君のほうがよくわかりますけれども、要するにフレックスタイムというところとわからない方がいますけれども、要するにパートと同じで、中山さんはずっと働いていますけれども、もう主婦で10時から3時までとか、朝・午前中だけとか、草刈りだけとか、そういう方も、農業というのは今までの固定概念があるもので家族でやるものでないんです。いろいろの中の経営者を、この人が経営者イコール親父、世帯主、若いですが、そしてそこを取り巻く、人間でいえば孫がいたり、おじいちゃん、おばあちゃんがいたり、そういうような農業経営をしていくもので、時間のほうも、1日24時間かかりませんが、数時間、もしくはフルに8時間とか、そ

うというようなことをしていかないと地域農業は守れないというのが、今の日本の、今後の農業の方法だと思います。

○内山理事長

今までの農業というのは家族完結型であったり、家族で全部やらなくてはいけないと、でも、その要するにいろいろな仕事をこう分割したり、分け持つ、それをマネジメントすることによってシニアの人たちがいろいろなステージで活躍できる場というのは、松木さん、これ、つくれるんですね、これは。

○松木裕さん

そうですね、比較的、機会的な単一作業、流れ作業ではなくて、1日の中で植えつけがあったり収穫があったり、草取りがあったりというふうに複数の仕事がありますので、中山さんのように1日働いてくださる方もいれば、早朝だけという方もいる中で、必ずこう、やはり作業をしていると得意分野、不得意分野が入ってきて、その得意分野というのにうまく当てはめてあげると非常に、その年齢を感じさせない、非常に質も能力も高い仕事をしてくださるというふうにも実感しております。

○内山理事長

それはこう、マネジメント力ですか。

○松木裕さん

そうですね、はい。

○内山理事長

矢野さん、またマイクをすみません。要するにハローワークや職業安定所なんかには、やっぱりそういうメッセージ、アナウンスをしてもらっただけけれども、やっぱり上手にしないと、何か農業というとなんか非常に固定観念があるんですけれども、その辺も細かく、いろいろな働き方があるんですよということをアナウンスするように仕向ける。

○矢野コーディネーター

そうですね。求人票というのをつくるんですね。そこるところに、通常だったら何時～何時幾らとか、そこをもう少し細かくつくっていただくように、まさに社長さんがお話されたような、仕事の切り出しですね。切り出しでそれをちゃんと載せていただく。もしくは高年齢者対象なり、そういった障害者はOKとか、そういったいろいろな、1ミリの紙の中にも工夫をしてそれをPRする、そのことによって裾野が広がりますよね。そこは本当に、先ほど言いましたとおり、障がい者でも、どなたでも働きやすい環境をつくる、まさにユニバーサルな農場、農業にしていくことによって、ということ、社長さんが本当に進めていただいておりますし、私もそのとおりで、農家さんへの働きかけをしています。

○内山理事長

それがとても大事ですよ。今、ユニバーサルという言葉がありましたけれども、例え障がいがあっても農業に携わることはできると。

○矢野コーディネーター

そういうことです。そうです、そうです。

○内山理事長

どういうふうなところで働けるかということをはきちんと、やっぱりしていく必要がきっとあるかもしれませんね。はい、そうですか。

松木さん、そういう意味では、要するにいろいろな人たちや、いろいろな年齢層の人たちがいらっしゃる。それはどんなふうにかこうマネジメントしていく、何かその辺のご苦労はありますか。

○松木裕さん

そうですね、自分は独立をしてから幸い、大変年齢層、老若男女問わずバラエティ採用することができて、まさに20代から70代の方までがこう働いてくださっているという状況の中で、やはり女性だったらこう、こういう作業が得意だったりとか、やっぱり一つの傾向とかがあったりしますし、レタスでいきますと、あまり重たい作業というのは、重労働というものは限定的になったりしますので、そういうところは自分であったりとか、外部と一緒に協力しながらやってという、割りふりをよく見るようにはしていますね。

○内山理事長

なるほど。中山さん、中山さんはあれですか、いろいろな能力だとか、キャリアだとかよっていろいろなできること、できないこともあるんですけども、自分の得意分野、これだったら俺はできるよというのは何ですか。

○中山正彦さん

そういうふうにかかれると困るんですけども・・・

○内山理事長

ということは、何でもできるということですね。

○中山正彦さん

いや、何もできないから本当に足を引っ張って、こんなことでいいのかなと、日々、反省させられています。

○内山理事長

でも強力な戦力だと、こちらはおっしゃっているんです。

○松木裕さん

本人はそういうふうに言っていますが、非常に中山さん、レタスの切りがきれいな方なので、レタスの品質というのは切り口とかで決まったりしますので、そこをこう丁寧にやったださるかどうかで、こう品質ひとつ変わってしまいますので、そのあたり、非常に長所として感じています。

○内山理事長

なるほどね。社長、これは将来、こういう働き方や何かはとも、やっぱりこれからの日本の農業のあり方としては、やっぱりひとつ示唆に飛んだ方向性かなと思うんですけれども、どうでしょう。

○嶋崎秀樹さん

今、非常に世間、テレビでは外国人権研修生の緩和ということで、私はあれは、それはそれでいいかと思います。しかし地域農業を守るのはやはり、こういうスマート農業とか機械ではなくて、やはりこういう経営をする人、それからそれを手伝ってくれる旦那さんと奥さんみたいな関係、やはり、うちがやるのはやはりそういう、長野県はすごく農業が盛んな地域で、農業人口がだんだん減りつつありますけれども、ぜひ、私はとりあえず、うちのまねをしてもらうのが一つ、一つは松木君のような方の、ほとんど諏訪地区に限らず、あちこちにつくっていきますので、コーディネーターの方々は、逆にいうといろいろな場所で、諏訪だけじゃなくて面接をしていただいて、松木君と中山さんのようなパターン、お見合いを、親子関係をどんどんつくってもらうことによって地域農業が活性化されると思うので、そこはぜひ、内山さんたちにまたお願いしたいというのが本音でございます。

○内山理事長

ありがとうございます。ちょうど時間になりました。ここまでにしましょう、どうもありがとうございました。

テーマ③：介護予防・日常生活支援総合事業に係る協議体の立上げ支援

○内山理事長

では3番目の、3番目のテーマでありますけれども介護予防・日常生活支援総合事業に係る協議体の立上げ支援についてということであります。

これは、お席のほうにお願いします。中野市の高齢者支援課長の吉村さん、それから、自主グループの青空の森川さん、そしてシニア活動推進コーディネーターの戸田さんと松永さんでいらっしゃいます。よろしいでしょうか、

戸田さん、これは中野市の中・・・なんだっけ。

○戸田千登美主任シニア活動推進コーディネーター（以下「戸田コーディネーター」）

なっちょ隊・・・

○内山理事長

なっちょ隊ですよ。なっちょ隊という、なっちょだいと聞いたんただけれども、なっちょだい、なっちょ隊・・・だいね。

○戸田コーディネーター

「なっちょだい」だそうです。方言で。

○内山理事長

「だい」ね、方言で、「なっちょだい」、どうだいというようなことですね。その活動について、まず、ざっと説明願います。

○戸田コーディネーター

コーディネーターの戸田です。本部におります。

私は平成26年からですか、初めからコーディネーターをしております、今日の取組の経過を見ていただいてもおわかりかと思いますが、中野市のこの介護予防日常生活支援総合事業にかかわる協議体の立上げ支援と書いてありますが、立上げ支援というよりかは、そのプロセスに寄り添った支援ということぐらいなんです。

まず、どんな経過で中野市さんとこんなおつき合いをする形になったかということ、平成26年の実は二毛作県民会議がきっかけで、そのときの構成団体の一つでありますケアマネさんの協会の会長さんがメンバーで、二毛作県民会議のメンバーに入っていました。その年のコーディネーターは3名でしたので、事例発表をした際のそのことをケアマネ協会さんとして情報発信をしてくださった、それを中野市のその当時の保健師さんが聞いていて、その保健師さんから問い合わせがありました。中野市も総合事業の取組を始めるに当たり、何をどうしてどうやっていくのかというようなことに困っているというのが1点。

もう1点は、介護予防教室を既に毎年やっていたんですけども、そのやって、受けているほぼシニア層ですよ、シニア層の皆さんが、自分の介護予防になるためだけで、その先、活動者になっていかないというのが2点目の課題だという相談がありました。

いろいろお話をやりとりして、その当時の総合事業の担当職員、課長さん以下、多分、7人ぐらいいらっしゃったかどうか、まず中野市役所に行ってその皆さんたちとお話をしたり、県内のシニアの状況をお話したりということで、私が伝えたかったのは型から入るのではなく、住民の皆さんにはやっぱり力もあるし、既に地域にもさまざまな活動があるというような、あまり急がず、型にはめず、自発性を培っていきましょうというようなことから始まって、おつき合いをし始めました。

その当時、北信のシニア大学の担当の推進員さんだったのが松永さん、松永さんはまだ、松永さんの前任者ですね。やっぱりそことも連携しないといけないなということで、北信学部も連携しながら中野市の担当者と皆さんでさまざまな連携をしていったんですが、その中には、まずシニア大学の授業を見ていただいたり、保健師さんたちに、あとはタウンミーティングに実際に来ていただくことによってシニアの皆さんの、何と云うか、活躍ぶりというか、もう本当にこうやっている姿を、やっぱりもう実際に見ていただく、現場を見せるということでやりましたし、その後、27年に入って、その当時のコアメンバー、社協さんだったり、保健師さんだったり、北信総合病院の方だったり、ちょっと全然オフ会ですけども、こんな中野市になつたらいいなという夢を語る会みたいなものを開いてみたりとか、そんなことでずっとおつき合いをし、介護予防のOBの研修を少しやらせていただいたりとかして、ずっとおつき合いをし、シニア大学の北信学部の授業に実際に中野市のこの担当者の皆さんがかかわってくださって、中野市をまず歩いてみようという地域、町の縁側講座というのをシニア大と中野市の介護支援課の担当者の皆さんと実行委員会形式にして、シニア大のOBも誘いながら授業として中野市を歩いてみるとか、いろいろなことをやって、そうこうするうちに中野市の担当の皆さんの中でもどどんいいろいろな話し合いが行われていて、総合事業に向けて意見交換などを、もうコアメンバーを集めながら始まったと、それはもう、吉村さんに後から話をしていただいて。

それを経て、その途中で、そもそも協議体のコアメンバーを集めていくんですが、総合事業とは何なのか、協議体というのとは何なのかというときに、片や私は今の立場で、県の介護支援課さんの体制整備事業のほうの会議にも出させていただいていたので、今日お越しだと思いますが、介護支援課の小林さんにちょっとかかわっていただいて、中野市で呼んでみたらというようなことをつないでいただいて、もう、そんなことで県の介護支援課さんにもかかわるような橋渡しをしたという。

その後、30年に入って、松永さんが推進員を経てコーディネーターに、北信学部に配置が決まったので松永さんがコーディネーターになりました。そこからは私は本部コーディネーターなので、その協議体や、なっちょだいに名称を変えて、毎月のように会議をやるものにはなかなか出られないことをこう、スライドして松永さんがずっとかかわるということに、いま現在はやっているんですが。

さっき、ちょっと松永さんと話をしている、松永さんも4月にコーディネーターになって、協議体とは何なのだとするところで、私たち定例会を毎月やっているんですが、定例会の午後、先

ほど介護支援課の、県の介護支援課の小林さんにまたちょっと来ていただいて、コーディネーター全員が、その総合事業に関して研修をするという時間を設けて、それを松永さんも聞いていたというのあって、中野市の協議体にアドバイザーとして松永さんがかかわっていくと、今はもう毎月のようにやっているものは松永さんがずっとかかわり、コーディネーターが北信についてよかったなと私は思っているんですけども。

そんなことでやって、いろいろな話し合いを何度も重ねる中で、昨年10月ですね、協議体主催で支え合い地域大交流会というのを始める企画を、もう協議体の皆さんが自分たちでたてました。その手法として長寿社会開発センターの幾つかの支部でやっているタウンミーティングの店出し方式という、その手法も活用したいということで、そういうようなことのノウハウを伝え、松永さんのほうからもお伝えしていただいて、そこにもシニア大学もかかわりながらこう、何というんですか、いろいろなものをこうつないだり巻き込んだりしながら、「なっちょだい」というようなものが、今、動き出しているという、ざっと流れです。もう中身は皆さん。

そしてもう一つ、ごめんなさい。森川さんに今日お越しいただいているのはその流れの中で・・・青空の、一番初めの26年に介護予防教室をやっているんですけども、OBばかりたくさん卒業していきただけでも、その方たちがやっぱり自発的な活動者になっていくにはどうしたらいいんだろうというようなことの相談も受けつつ、もうこれは、私なんかは本当に少し口頭で何か話したり、いろいろ、やり取りをしたぐらいなんですけれども、さっき吉村課長さんも相当の中でどのようにアプローチをしていったら自発的に皆さんが、何かやろうよ、自分たちの地域のことからというようなことになるんだろうかということは相当練ったそうです。

今まで市役所の手法ではやらなかった手法を一つ取ってみたら、ああ、こんなに変わるんだという、また吉村さんから聞いていただくといいんですが、そんなことで自発的に立ち上がったグループさんが森川さん、きょう来ていただいている幾つかのもうグループの中の一つの森川さんがサポーターとしても活動されているということで、森川さんにも来ていただいています。

○内山理事長

はい、ありがとうございます。そして松永さんですけども、松永さん、去年から北信地域のコーディネーターですか、その前はシニア大学を担当する推進員さんだったんですね。

○松永静香シニア活動推進コーディネーター（以下「松永コーディネーター」）

はい、2年間そうでした。

○内山理事長

コーディネーターになられて、水を得た魚のごとくですね、何か地域を動き回ってすごい活動を、いろいろなつなぎをされているということなんですけれども。

今日の協議体の立上げということで、ちょっと絞って話をすればどんなふうな役割を果たされたんですか。

○松永コーディネーター

そうですね、平成29年1年間かけて、中野市で協議体、話し合いをされてきたというところの経過までは聞いてはいたんですけども、実際、かかわってはいなかったので、中身でどんな話をしてきたかというのはまずわからなかったですね。

最初、30年の4月、この4月からかかわりだして、最初はまず、本当にじっくりと話を聞かせていただいている状態だったんですけども、皆さん迷われながら、行き先が見えないところで迷われながらやられているんだなというのがすごく、第一印象でした。でも、その1年間話し合われてきたことには意味があるんだよという点、それから、ではベースは何なのか、「なっちょい」としてはどうしたいのかという、この場はどういう場なのかというのを、ちょっと言葉として明確にしていったらどうなんだろうかというところのアドバイスのあたりから、かかわらせていただきました。

○内山理事長

また戻っていきますけれども、そして行政の高齢者支援課長の吉村さん、先ほど戸田さんから、やっぱり吉村さんのこの視点、やっぱり行政マン、ウーマンでいらっしゃるんですけども、やはり視点がやっぱり、ちょっとふつうの行政マンとは違うねという話を先ほどから聞いていたんですけども。

やはり何を大事にしてこう、その事業を進めていらっしゃるのかなという感じがするんですけども。

○吉村恵利子 中野市高齢者支援課長（以下「吉村恵利子さん」）

そうですね、介護保険法の改正で、今、出ている総合事業というものを確立したような、市町村が実施するというようになっていて、これはどのように実施してもよくて、地域の実情に合ったものを作り上げていくということが大筋になっているんですね。

ですので、こうすべきルールもあるわけでもないの、だからこそ難しかったし、どちら、どういう方向でやっていけばいいかというところが、各自治体、市町村、みんな迷っているし、悩んでいるところだと思うんですが、そんな中で中野市としては、先ほど26年からどうやっていいかというところをご相談させていただいて、長寿開発センターの戸田さんだとか松永さんだとか、理事長さんにも随分いろいろご指導いただいたんですけども、まあ市町村だけではやっぱりどうやって、やるべきことはわかっているんだけど、どうしたらいいかというところがわからなかったところを、アドバイスだったり、整理していただいたところ、やっぱり今まで自分たち気づかなかったところ、当たり前にあったものを意味づけていただいたところを、もっと大事にすべきなんだなということを感じたというところが大きかったと思いますね。その気づきを大事にやっていくことが大事だというか、そんなところで、今までやってきたんですけども。

○内山理事長

気づくという言葉でいうと、僕も北信のシニア大の授業を持たせていただいているんですけども、中野の行政の人たちが何か必ず授業に立ち会って、それでシニアの学生さんと一緒になって、何かこうワークをやったり、ディスカッションをやったりする。その中でさまざまな、行政的な立場からのご意見をいただいたりなんかして、あれも我々にとっても、とても学びの場だったなというふうに思うんですけども。

毎回ご出席していただいたというのは、とても我々にとっては意味のあることだったと思うんですが、その辺どうでしょう。

○吉村恵利子さん

最初に、26年のときのシニア、27年の1月に市の担当者が初参加となっていると思うんですけども、私、27年からこちらに、4月から配属になっているんですけども、そのシニア大学のあの場でシニアの皆さんたちの活動を目の当たりにしたときに、この場は本当にお宝だなと、私はそのときに感じたんですけども。

今までそういった手法も知らなかったし、こういう活躍をしていらっしやったり、こんな力があるんだなということをやっぱり気づいたというか、感じたところがとても大きかったと思います。

○内山理事長

そして、ちょっと時間がないので端折りますけれども、この前ですね、行われた支え合いの地域、大交流大会なんていうのも何かとっても生き生きと仕掛けて、そして我々がやっているようなタウンミーティングの手法でやられて、あれはどんなふうな、皆さんどんな印象を持ったんでしょうか。

○吉村恵利子さん

感想だとすると、やっぱり地域にはこんな、まずそれぞれの団体の方は知らなかったし、そこで出会えたし、中野市にはこんな団体もこんな活動もあったんだねというところを皆さん気づいて知り合えた、つながったということです。

○内山理事長

まずいろいろな活動がもう既に地域の中にあるんだということを、お互いが知り合うことがまずできたということが大きかった。

そして、活動者同士の何かこう交流や結びつきや、コラボレーションも何かあそこで進んだのかなという感じがしましたけれども。

○松永コーディネーター

そうですね、それはまた、森川さんから。はい。

○内山理事長

森川さん、活動者がいらっしゃいますけれども、はい。どうなんですかね、あの交流大会なんか参加したり、日常の活動から見て。

○森川治幸 運動自主グループ（青空）（以下「森川治幸さん」）

交流会というのを私たちよくつくって、初めてなんですけれども、中野市にこんなにいっぱいいろいろなクラブがあるというのも、私、初めてなんです。

それでも、交流会のチラシをつくる時に、私たちもみんな協力してつくったということと、その交流会でみんながやったことに、これで、私たちもこれだけみんなの前でこれができるということのうれしさというのがいっぱいありましたね。

○内山理事長

参加した人たちが、何かとっても生き生きとして帰っていかれましたよね。

戸田さん、何かそのときの皆さんの感想というのはあるんですか。

○戸田コーディネーター

ええ、あと・・・

○内山理事長

これ、こんなのが出てきましたね。どうぞどうぞ森川さん。

○森川治幸さん

私たち、その後、発表したことで、私たちの会へ2人入会することになりまして、それで、やっぱりみんながその会議に出て、やったということに充実感というか、大勢の前でやってきたというのが、皆、話していましたが、そのときにちょっと私たちのグループでフォークダンスをやると、そうなんですけれども、それをその会場でフォークダンスをやったりして、皆さんにも一緒に楽しんでもらったということが、私たちの大きな自信にもなったような気がします。

○内山理事長

吉村さん、これ一口で成功してうまくいったと言ってしまえばそれだけのことなんですけれども、その成功に至る、このプロセスがとても皆さん大事で、それが学びの場になっていたというお話もお聞きしましたけれども。

○吉村恵利子さん

そうですね、まずその協議体に関与する前に、ここには生活支援コーディネーターが28年10月に配属されているんですけれども、やっぱり彼女一人ではやっぱり荷が重いうまくできなかったので、やっぱり課内で、会議の前に行行政としてどういう方向にするかという会議をやって、その後、進めていただく松永さんたちとの会議をやって、それで本番の会議に向かうみたいな、や

っぱりこう、丁寧にみんなで協力しながら、全体としての共有としてやっていったというところが、みんなの思いの共有は図れていったのかなというのがあります。

○内山理事長

戸田さん、これやっぱりやって、いろいろな人たちがいろいろな思いで学んだことや気づいたことや何かが多かったと思いますけれども、これ、そのときのまとめのあれなんですね。

○戸田コーディネーター

これは交流会の反省会のホワイトボードの映像ですが、一貫して私がずっと26年から中野市さんとおつき合っていて、一つは高齢者支援課の職員の皆さんの意識が本当に共有されていて、吉村課長以下、皆さんが本当にチームワークでこの事業をやっているなど。特別立ち上げることを目的ということではなくて、本当に地域づくりにつながっていくんだということが全然触れていないので、皆さんの本当にチームワークを感じて、さらに、今、協議体のなっちょだいが立ち上がって、だんだんメンバーが入ってくるんですけども、だんだんその方たちも変化していく、変化していくきっかけとなったのが、多分この大行流会でこういう姿を見たJAさんとか、シルバー人材センターさんとか、なっちょだいのメンバーの方たちがやり終わった後、変化がだんだんしていくのが、私がやっぱり外から見てもわかったり、このところに、やっぱり地域に力があることを知ったというような感想が、これ、なっちょだいのメンバーの反省会の気づきなんですねけれども、なんというか、すごく前向きに振り返りがたくさん出ていたなということで、あと、今日、ちょっと都合でこられていない生活支援コーディネーターの小島さんなんかはもう本当に、ここに私も書かせていただいたんですけども、非常に現場に出ることと、もう一方、やっぱりきちんとその学ぶ学習をするということを繰り返し、必ずこういうことを、みんなの意見を聞いて非常に悩み苦労している姿をずっと見たんですが、今日は吉村さんとも話していたら、吉村さんがやっぱり途中でつぶれてしまいそうになると、これやっぱり総合事業を進めている一人だから、それをやっぱり係りで支えていくということをやっぱりずっと言ってきたし、みんなでやっぱりやっていくんだということで、松永さんと吉村さんがしきりに、この29年が苦しかったんだとさっきから話をずっとして、相当苦しかったらしい、もうやめてしまおうかと思うぐらい苦しかったらしいんですが。

吉村さんがずっとやっぱり、今は種まきのときだからということをやっぱり一環して言っていくださっていたというその背景があって、その辺のやっぱり、考え方とか視点とか、どこに向けていくのかと、ただただ形をつくれればいいということじゃない、その辺が私たちの長寿の目指すところなんだと、中野市さんのところとやっぱりすごく共有できる場所で常に常にメール、電話、そして会って打ち合わせをするという、ものその繰り返しです、今は。

○内山理事長

本来、住民が持っている力、それをやはりどう、やっぱり上手に引き出すのかということを見んなが知恵を重ねて、やっぱりチームワークで話し合い、それを形にしていくという、そのプロセスがとても大事だったんですね。

○戸田コーディネーター

そうですね。ちょっと吉村さんからお聞きしていただきたいんですが、そのもう一方、森川さんのように活動する、自主的にやり始めたグループがぼこぼこでき始めたときがある、何かを境にしてあるんですけれども、何をしたか、吉村さんに。

○内山理事長

ちょっと、ちょうど時間になっているので、これグループワークにしましょうかね。では一言。

○吉村恵利子さん

今までは、教室をやって運動の指導、指導というか、お伝えして終わりなんですけれども、やっぱりそこでは自主的にいかないで、ひとつお茶飲みをやったんです。お茶飲みを、今までお茶飲み、教室の中でお茶飲み会なんてやるということはちょっと考えられないプログラムなんですけれども、そこにお茶飲み会を入れたところからちょっと変わってきて、今は11グループの自主グループが立ち上がって、その後、保健師も支援はしているんですけれども、その前段のところでお茶飲み会をしました。

○内山理事長

ありがとうございます。ちょうど時間が来たようです。